

集

俳句フォーラム

2021年1月 第78号



ほととぎす

石川東児

はまなす玫瑰の赤白特攻基地の跡
今の世も万葉の世もかなかなと
ほととぎす九十九に折れる女坂
窓閉ざす富士の演習梅雨晴れ間
茗荷汁思い出せない名がひとつ

三和土

仁上博恵

しゃぼん玉追いかけはしゃぐ父娘連れ
三和土もう晩夏の匂い金盥
埋もれいし記憶の層や立葵
ブラシの木の蘊蓄語る夏の果て
縦樋を照らす西日の柔らかさ

豊籾

大山夏子

へくそかづらの花猛禽の檻高く
篠笛が誘う望郷梅雨の闇
豊籾と老いたし青蔦茂りいて
冷房車周りだれもがマスクして
仏壇の夫に一切れ西瓜かな

秋の雲

重原爽美

乾杯のビール飲み干す泡もまた
座り込む一つ目達磨梅雨の末
育てても屑苺なり老いの如
色真っ赤味も真っ赤な草苺
米山に育まれ居て秋の雲

水車

治部少輔

蕎麦待たせ急ぐや奥の院緑
夏場所の榊席拍手一人なり
温暖化梅雨も明けぬに蝉の声
蝉時雨里に懐古の水車
御巢鷹は今も鎮魂風の色

コロナ禍

瀬戸美文

オリンピックの文月待つやスカイツリー
盆休みカーテン洗う二十枚
コロナ禍も水着の子らの笑顔かな
コロナ禍や食べに行けない桃のパフェ
朝採りの枝豆求め列なして

月

小笠原妙子

棋譜残す宇宙の若し月初秋
盆の月聞き役たりし猫偲ぶ
珊瑚礁の海掻きまはす野分かな
ゆらゆらり脳なしと言う海月かな
白桃の胸や尻なる産毛撫





無言館

渡辺節子

負戦の日祈り奏でる無言館
原子雲祓いのけ陽はまた昇る
洪水で流れし街夏の月
鍵盤に載せる調べや走馬燈
タクシーの空車連なる炎天下

みずすまし

大山夏子

みずすまし水面の雲の上跳んで
負の記憶夾竹桃が咲きはじむ
水羊羹ありし日の母と肩よせあい
敗戦日生きて兄居て弟も
同齡の訃報が多し秋の風

絆の糸

中川のぼる

水泡に帰せし顛末夏の露
縁に出て風と遊ぶや藍浴衣
若き日の夢は今でも虹のなか
寒蝉鳴く絆の糸の太さとは
車僧置き忘れ来し夜長かな

百日紅

江口九星

水鉄砲まき散らしては彩の雲
スポーツジムの窓のぞき込む緋のキャンナ
梅雨明けの満月煌々背伸びする
花木槿織部の茶室無限なり
百日紅ビジネスの日々きびしくて

秋風

伊藤昌枝

藻の花の清しき流れ毛越寺
搾乳の牛見える窓秋の風
秋の囲にまざと恐ろし女郎蜘蛛
積荷待つ貨物列車にちちる鳴く
赤まんま休耕田を埋め尽くす

秋刀魚

吉宇田麻衣

百日紅色づき気付く通い路に
通り抜け先には燕子らが鳴く
同窓の友を見舞し油照り
秋刀魚焼く煙の中にしあわせを
一つづつ鍋を磨きて秋澄むや

異極の地磁気

楠本和弘

水に記す悠久の文字夏の月
大吟醸酌みて如水の夏座敷
ジヤズ眩し波のあなたを遠花火
魔術師を率ゆや丘の秋茜
銀漢や地磁気異極の溪の中

日向の匂い

渡部恭子

昼寝の子日向の匂いも大の字に
生れし事集きて謳歌虫の秋
身に沁みや砂落つ速さ砂時計
新涼の海見に一日乗車券
車椅子にはにかみし考秋彼岸

肩車

小澤えみ子

長雨にさすがの茄子も無駄花に
手花火の雫地に落ち闇弾く
新型ウイルスの浮遊秋暑きりもなし
ふるさとが遠くなりしや虫時雨
肩車されて取りたる烏瓜

虫の楽隊

酒井たかお

水脈を引く小舟を追って夏鷗
夏霧の湧くたび山も見え隠れ
上りても縮まらぬ距離夏の月
八月は幻想の旅駱駝の背
障子開く虫の楽隊目の前で

仙人掌の花

由良則子

仙人掌の花の揺らめき薄紅に
地を這いし莖のたくまし露草の
五臓六腑揺るがして鳴く蟾蜍
夕暮れの椋鳥めまぐるしき布陣
秋暑積む貨車五十輛延々と



赤とんぼ

平野無石

風を見てをり楼門の蝉時雨
八十路には散歩が命百日紅
家ごもりを解きて無沙汰の墓参り
切株に見つめる命赤とんぼ
まだ生きるつもり的一步ちちろ鳴く

雲晩夏

都築繁子

青梅雨や並ぶ埴輪の丸い口
ふるさとの想いは消えず雲晩夏
魂迎う感謝の言葉言いたくて
川風に吹かれ秋思のほどけゆく
目に耳に杜会の変化蓮は実に

ミニトマト

植木やす子

枯あじさい名残とどめる登山道
箱根路や軌道を隠す霧深し
コロナ禍と豪雨のパンチ夏憂う
ミニトマト色づき今日の食卓へ
炎天下蔭を追いつつコンビニへ

夕星

田中藤穂

城跡やすぐそこの木に啄木鳥が
立秋は過ぎたかと女医に問はれけり
僧と遇ふ谷中細道秋めけり
蕎麦の花八ヶ岳の裾野の昏れなずむ
夕星や秋の歳時記膝に置き

日比谷公園

篠田純子

牛馬も憩し水場蝉しぐれ
夏草や錆びし鑄物の水飲場
噴水の向こふとこちら団扇振る
首かけ銀杏みんみんの声さかん
端居今スカイツリーに青ともし

白の一日

大山夏子

芙蓉大輪白の一日つつがなく
今日は夏至なかなか暮れぬ長電話
霧霽るる朝の珈琲砂糖抜き
原爆忌指圧に頼る日の増えて
豆を煮て自粛の夏を終らせる

